

引率を終えて

小金澤 節子

私たちを乗せた飛行機は轟音を上げ滑走を始めた。ほどなく地面を離れぐんぐん上昇し、グアムが遠のいていく。今、派遣生たちは何を思っているかしら…。グアム派遣柏市中学生がこの地に足を踏み入れたのはわずか7日前のことである。派遣生にとってこの7日間はどのような日々だったのだろう。“帰りたくない、ずっとここにいたい、すごく楽しかった…”と目を輝かせて話していた彼ら。

カウンターパートと仲良くなれたこと、ホストファミリーと楽しく過ごしたことが大きく自信につながったようだ。派遣生とグアム生が楽しく過ごすことが交流の第一歩であり、その意味でこの派遣は概ね成功と言えるでしょう。交流は相手があつてできること、この交換派遣プログラムは1枚のジグソーパズルに例えられると思う。それぞれのピースごとに役割があり、あるべき場所におさまって初めて繋がった1枚の絵となる。

そしてそのピースはすべて、派遣生がグアムで楽しく安全に過ごし、元気に日本に帰ることを願っているのだ。派遣生はこのことを心に留めておいて欲しい。そしてグアム生来柏の際、今度は自分たちが彼らを気遣い、楽しませ、柏のことを話し、このパズルを仕上げたいと思う。

話したいのに英語でどういふかわからない、相手の話すことがわからないなどでカウンターパートとの関係がうまく築けず、苦しい思いも経験したのではないかと思います。それだけ頑張ったということであり、仲良くなりたいという強い気持ちがあるからこそ生じる苦しさだと思います。人と会話することによって、元気や楽しさ、時に辛さ、苦しさなど、それほどの力をもたらしたり、与えたりしていたということを再認識したのではないのでしょうか。その苦しさを忘れずに、勲章と思って次の新たなステップに向かって欲しいと思います。

楽しかった経験から、また海外に行きたいという気持ちが沸いてくることでしょう。好きなことの中から将来につながる何かを見つけられたら、こんなに良いことはないと思います。

グアム派遣の目的は個人の育成や英語教育ではなく、あくまでグアムの人との交流にあります。しかしながら、この経験が派遣生の未来を明るくし、将来、社会で活躍される人となることを私たちは期待しています。

また、大人になった20回生が引率者として再びSt. Francis Schoolを訪問し、柏生の中にかつての自分の姿をかさね、柏生のカウンターパートがかつての自分のカウンターパートの子供で、大人になったカウンターパートと再会、などということがいつか起こるといいなあと思いを膨らませています。

グアムはそう遠くありません、いいえ、近いです。

カウンターパートと永くつながっててください。

自身は派遣生の中に6年前の娘の姿を重ね、St. Francis School、チャモロヴィレッジ、Two Lovers Pointなど、彼女が訪れた場所を見ることができて感無量です。

気がつくと、窓から日本の明かりが見えている。着陸態勢に入ったとのアナウンスが入る。

交換派遣プログラムの半分が終わろうとしている。また日常が戻ってくる。忙しい日常が…。

出迎えの方の“お帰りなさい”の声にホッとします。

無事に帰ってこられたこと、カウンターパートやホストファミリー、ロレッタ先生、ジャレッド先生をはじめとするSt. Francis Schoolの皆さん、そして引率の普輪崎さんに感謝いたします。

また、この派遣に関わってくださったすべての方々に御礼申し上げます。



チャモロビレッジナイトマーケットにて